

(2) もっと厳しくを願って

4月に入って小学校から大学・社会人までピカピカの新入生たちが街のそちこちで目につきますが、食の分野では放射性セシウムの新規制値基準が施行され、流通各社の対応が種々と報じられています。又、新基準による4月1日以降の自治体による検査結果が厚労省に報告され、1週間に1459件の内42件が新基準を超えたということでした。従来の暫定基準値を超えたのは9件だけだったといますから、厳格化されたが故に検出されたものでしょう。厚労省の担当者も、これまでに高い数値の出たものを優先的に検査するように求めていたとのことですから、当然の結果として受け止められているようです。

一方では、大手を始め中堅に至る流通各社も自己防衛の為か、独自の検査を始めています。しかも、多くは国の基準値に準じているか、それ以上に厳しい独自基準を打ち出しているものばかりです。例えば、某社では国の基準100ベクレルの一般食品について25ベクレルとしたり、50ベクレル基準の牛乳は10ベクレルとするなど、大幅に低い数値基準で販売中止の判断をすることでしています。それぞれの企業が独自に基準を決めるのは構いませんが、それに振り回されるのは消費者です。国が安全宣言を出した後に暫定規制値を超えた食品が出回るなどしたことから、公的検査への信頼は失ったままです。

国などの公的検査が川上の生産地を中心に行われており、企業の独自検査は多く川下で為されているようです。それはそれで良いとは思いますが、バラバラな基準や検査体制ではどれを信じれば良いのでしょうか。先日の日経紙の社説が言っていました。「食べものから完全にリスクを取り除くのは難しい。魚の刺身も生卵も、食べる、食べないは、突きつめれば個人の判断だ」。確かに開示された情報を判断するのは消費者自身です。降りかかるリスクを評価し判断するには基になる情報が欲しいし、それがより詳細なものであって欲しいはずです。そういう願いは、「もっと多くの品目で、もっと厳しい値で」求められるのではないのでしょうか。

(鈴木 重雄 筆)